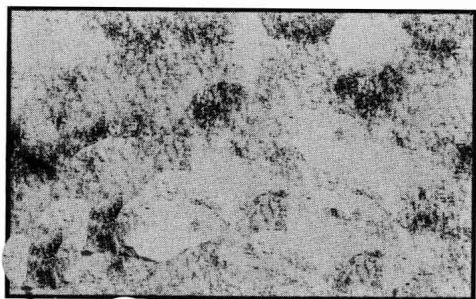


引潮

庄野潤三

引潮



庄
野
潤
三

新潮社版



引き

潮しお

昭和五十二年五月五日 印刷
昭和五十二年五月十日 発行

著者 庄野潤三
しやうのじゅんぞう

発行者 佐藤亮一
さとうりやういち

発行所 株式会社新潮社
しんしやうしゃ

郵便番号 一六二

東京都新宿区矢来町七十一
電話業務(03)二六六一五一一

編集(03)二六六一五四一一
振替東京四一八〇八

定価一〇〇〇円

印刷 三晃印刷株式会社・製本 植木製本株式会社

©Junzô Shôno 1977, Printed in Japan

乱丁・落丁本は、御面倒ですが本社通信係宛御送
付下さい。送料本社負担にてお取替えいたします。

引

潮

棚井津の倉本平吉さんが口癖のようという言葉がある。

「年はなんぼになつても、わしら、ほんとう井戸の蛙いなあ」

今年の二月、ちょうど節分の豆まきの日に会つた時もそういつた。

「わしら、いつもいいよるんです。島を離れることは滅多にない。島どころか、生れ在所のこの部落を離れるといえ、漁に出る時ぐらい。鳥や鳶さえあつちこち見て知つちよるが、金が無けりやどこへも行かれん。こりゃいよいよ鳥より詰まらん」

「でも、うんと遠くまで行かれたでしょう、南の方へ」

「ああ、あれかね。あれはまあ、どういふもんじゃったかなあ」

倉本さんは、仕方がないというふうに笑つた。

「あの官費旅行もええ加減のことじゃつたな。あれが東京から千里いうんじゃがな」

「フィリピンがですか」

「はあ」

「知らない国を見物して、それだけで帰してくれるのならいいのですが」

「それで済まんのかやけえ。面白い目に会ふんならなんぼう遠いところでも行くが、男の子がおるから、こりゃ困つたことになつたとそればかり気になつた。またわしの二の舞いをせにやならん思うて。女の子ならそれが無いでしょう。まあ、看護婦になつて行くぐらい」

「ええ」

「この分は、病院は撃たんのじゃけえ心配はない。男の子ならどうでも兵隊で弾丸をくぐらんらん。それがわしのところにこまいのがおるでしょう、十一になるのが。心配でならざった。いまでも時々、夢をみたりするがなあ、現場におるような」

「戦地の？」

「はい、はい」

「橋を架けていた時のあれですか」

「橋を架けていた分はみんな、ほかの時のをみる」

「どういうふうな」

「夢ですか。いま、ちよいと記憶に無いが」

瀬戸内の島で船大工をしていた倉本さんは数え三十八の年に召集を受け、比島上陸作戦に参加したあと、モンガイヤンというところで橋を架ける作業をしていて、河原へ真逆さまに落ちて負傷した。この出来事は、六年前、海水浴に来て初めて会った時に聞いた。

私たち——というのは、広島から汽車とバスと連絡船を乗りついで道案内をしてくれた妻の甥と姪と私の家族と合せて七人が、近くの浜で夕方まで泳いだあと、宿の二階の三間続きの部屋で寛いでいた。そこへ船頭さんが来た。次の日はげ釣りの打合せのために寄ってくれたのだが、それが倉本さんであった。

現役の時に二年、広島にいたということから始まって、工兵をドカチン、つまり土方というのは鉄砲よりも鶴嘴の方が大事といわれるくらいだからで、召集になった自分がフィリピンへ行ったのもそのドカチンとしてであったという話の続きが、いつともなしにそこまで行った。

「みるのはみますよ。何十回みたか分らん。それもないがいこちが率の悪い夢ばかり。目が覚めたら、もう寝られやせんのですよ。こっちが有利な夢をみるんらよっぽどええんじゃけど、それはみん」

「そうですか」

「この頃行けば、ずうっと戦争をした現場が分るんじゃから、懐しいことは懐しい。行ってみたような気もするが、どうでもええです」

本当にどうでもいいというふうに、思い切りよくいったので、笑ってしまった。

私たちは、窓から入江の突堤と中にある船の見える簡易旅館へと玄關の古びた表札におとなしい字で書いてある「武上の二階」にいる。冬には周防灘から吹きつける西風で海が荒れると聞いていたので、覚悟して来たのだが、拍子抜けするくらい、暖かった。

もう崩れるかもう崩れるかといいいながら、こんな穏やかな日和が十日近く続いていると、上関からここまで来る崖沿いの山道で年配のタクシーの運転手がいった。

「時候は悪いですよ、確かに。年がら年中、日本の真夏じゃけえのう、フィリピンは」

「そうですか」

「馴れん人が行けば、やっぱり病氣も多いです。それにわしらあ、いまからさぶうなるいう時に向うへ行つてぬくうなつたんでしよう。あれで台湾にちよつとでもおったからええが、直接行つたんなら、あんた、水風呂から湯の煮えくり返つたんに入つたのと同じじゃ」

笑つたあとで暫く間があく。倉本さんは溜息をついた。

「まあ、それでもいろんな珍しいところを見ました。日本では見られんようなものを見たしなあ。あの方では稲の刈りかたが違ふんです」

「どんなふうに」

「普通なら下から刈りましょう。それがそうじゃないんです。上を刈るんです」

「上というと？」

「稲の穂が覗いちよる、あそこにこう節がありますいなあ。その節のまわりから刈る。そして、それを括って納屋へみんな納める。自分が食べようと思う時、それを出して脱穀をする、その日その日に」

なるほど、これは変っている。

「手ぎので脱穀するんです。大昔、日本でも手ぎのを使いよったんじゃない」

「手ぎの？」

「手ぎのいうてな、真中の、摺えるところをこう持って、両方が太うなっちよるんです。どっちでも逆さまにして使うことが出来るわけです。両方がぎのですねあ」

「あ、杵ですか」

「そうです。こちらであれをぎの、といいます。手で搗くから、手ぎのいうんです。あれで搗くんです、白へ」

「それで自分のその日、食べる分を」

「はい、はい」

「何だか気楽そうですね」

「それで米がな、あれをおえるいうがな、きれいに脱穀、精米が出来たか、どうして分るかという、手ぎのはまり具合で分るようになっちよる、目で見いでも。それを納屋いうか、自分の住居するところと別に建ててな、こんなふうに」

倉本さんは、ちょっと鉛筆を貸してもらおうかなという、私が差出した紙に器用な手つきで納屋の絵をかいた。

「これが四本、柱が立っちょります。そして今度、これの上へ桁を附けて、それから一階家の家をこしらえるんです」

柱の上に小屋を載せる。床は地面からうんと離れている。

「この柱にな、肝腎なものがある。どこかという、食物が置いてあるから鼠がそれへ行こうとする。鼠がおりましたよ」

「ええ」

「鼠が下からこう上るでしょう」

そういいながら倉本さんは、床を支えている柱に沿って下から矢印を入れた。

「上ったら、ここに鼠返しいうてな、こういうようなものが附けてある」

柱の先、納屋の床に接するところに、腕を伏せたかたちのものをかき入れた。

「ここまで上っても」

鼠の進む方向を倉本さんは鉛筆で示して、

「これから上られんから、すんと落ちるんやそうです。鼠は柱は上るんですよ。上るには上るけど、ここまで来ると、先へ先へ行こうとすれば、ひとりでに下へ向かにやあならんから、その拍子に落ちるわけです」

「なるほど」

「鼠返し、いうんです。それが必ずあるんです、どの納屋にも。四本の柱の上に」

「うまいことを考えましたね」

「それから、その納屋へ米を取りに行く時は、竹の梯子をかけて上るんです。床がちよいと頭が当らんぐらいの高さになっちゃう。竹の梯子をかけて取りに上って、上ったら今度は梯子は上へ引っかけておく」

「鼠が上れないように」

「そうです。開けんようなところではあるが、ええ考えをしたところもあるんです。そういう珍しいものも見ました」

「日本ではちょっと見られませんか」

「そして、床が高いというのは、ああいうぬくい国じゃけえな、風通しがええようになっちゃう。ちよっと雨が降っても雨宿りが出来るでしょう、床下で。どうして風が吹くのにな高く作ったかというて問うてみたら、雨宿りも出来るという。もう少し開けたところになると、地面をセメント張りにして、その上で脱穀をしよるがな」

「納屋の床下で」

「ええ。セメントで張ってあるから、筵もなんも要らんわけです。そこで手ぎのを使うのを見たから、日本にはこういうものがあるいうてな、だいがら臼のことを説明したら、ペリゴールいんです」

「はあ」

「ペリゴールいうことは、ええいうことじゃけえなあ」

「ペリゴール？」

「ええ、あれはアメリカ語じゃなあ。よろしいということです」

「あの、何を見せたんですか」

「白ですいなあ」

「日本の白？」

「はあ、あれじゃなしに足で踏む白。だいがら白、いいですがな。足で踏んで、踏んだら踏んだ方は下るが、杵の附いちよるかしらの方は上るわけやのう。今度は足を離したら、ぼっと下る。それで、中へ入っちゃう米を搗く。これをだいがら白いうんです」

「ああ、そうですか」

「こういうことをわしが絵にかいて」

といいかけたので、私はフィリピンの農家の人に倉本さんがかいて見せたのと同じ絵をかいて貰った。

「わしかたにはいまにあります。いま、あるものはわしが作ったんです、昔のは痛んだから。ここには殆どあれが家ごとにあるぐらいじゃった。みんな、自分で脱穀しよったから、精米所が無い時は」

「そうですか」

「わしらが子供の頃、そうじゃねえ、十ばかりの頃には、まだここには精米所が無かった。十」といって、倉本さんは少し考えた。

「十二、三ごろからかなあ。九州の桜島が爆発したのが大正三年ですよ。あの頃までは無かった。あれから後に開かれたんやなあ」

「それまでは全部、自分のうちでしていたわけですか」

「そうです。わしがいまに記憶があるが、蓄音機を初めてここへ持って来た人が、あれをかける」と歌が聞える。ところが、あれの中へ入って歌いよるといふから、くるくるまわって見たことが

あります。どこに入っちゃるんか思うて」

「それはいつごろですか」

「大正三年ごろ。桜島の爆発のあったその年か、明けの年です。爆発は大正三年一月十二日」

「よく覚えておられますね。新聞に出たわけですね」

「いいえ、ここへ来たですよ、煙いうか、砂けむりが」

「いいながら、倉本さんは窓の方を見た。」

「建具の、これはまあ、いまごろレールじゃけえ窪みが無いけど、こういうところがあるでしょう。あれが殆ど潰れるぐらいな」

「灰で？」

「灰が来たんです。わしが十一の年かな。尋常四年の時じゃろうかなあ。なんであんなに敷居が潰れるんじやろうか思うた、灰みたいのが来て。ところが、桜島の爆発したのがこっちへ舞うて来たんじやいうて」

「こんなところまでねえ」

「はあ。その年に覗き、いうのが来たんです」

「覗き？」

「爆発した当時のことを絵にかいたものをな、まるい窓から覗いて見せるんです。いろんな絵があるんですが、それがあの当時、とても珍しかったですよ。いま頃は何ともないがな。なにせ行ったことがないんじやけえ、何見せられても珍しい。桜島の爆発だけでなしに、人殺しがあったらそれを見せるんです。お客を集めて、何か歌うてな」

「ひとりで」

「いや、両方から節をつけて、拍子を取ってやるんです。夫婦連れです。男と女と両方へ別れて、歌をうとうてその絵の説明をするんです」

「なるほど、夫婦だね」

「上手に作ってありましたよ、あの歌」

「それは一人しか見られないんですか」

「いいえ、何ところもまあいいのが並んでいます。この両方の目が漸く入るぐらいのが。さあ、いくつぐらいじゃろうか。大分並んでおりました」

「大きなものですね」

「大方九尺くらいあるのかなあ、あの盤が」

倉本さんは鉛筆を取ると、

「こういうふうになっちゃう」

といいながらその「盤」というのをかいた。

「人間が、これがまあ頭としたら、こう胴体があって、立っちゃうんです。立っちゃうと、目の届くくらいの高さに窓が明いていて、その向うに絵がある。この両わきに立っておって、竹の棒で中の絵を指したり、叩いて拍子を取ったりしながら歌うんです」

「窓の明いているところは板ですか」

「幕みたいになっちゃうんです。とにかく、見る人はこの丸い窓から中の絵を見るわけです。これ、覗きいうんです」

これ以上率直な呼びかたは無いだろう。

「上には屋根が附いちよるんです、庇のように」

「何に積んで持って来るんでしょうね」

「さあ、何に積んじよったか。いずれここへ来るのは船ではある。離れ島であつたんじゃけえ、船です」

「そんなふうにしてこの瀬戸内の浦から浦へとまわっていたわけですね。道具をかついで、夫婦連れで」

「そうです。さっきもわしがいうたでしょう、一月十二日」

「ええ」

「一月十二日午前九時。午前九時いうのも分っているんです。歌にそれが入っておるわけ」

「ああ、それで覚えておられるのですね」

「子供の頃にはその歌も真似が出来よつたですよ」

「いまはどうですか」

「ああ、分らん」

また笑つてしまう。倉本さんは、時々、とぼけてみせるから、本当に覚えていないのかどうか、分らない。

「でも、覚えよい節なんでしょう」

「はあ。その事件のあつたことを歌うんです」

「物語にしてね」

「旅館やなんかで人殺しがあつて、傷がついて病院へ入ったり。実際あつたことかどうか分らんが、それが絵に出来ちよるんじゃけえな。現場を見ると同じような恰好になつちよる。本当の

ようですよ。ただ、あれがどんだん動かんからな。どんだん動いたら、テレビと同じことです」
ここでもう一度、フィリピンの話に戻った。

「まあ、時にはな、よく晴れた日に、夜なんか月を見てなあ、あの月でもやっぱりわしらがいま、こうやって見よるように日本から見えるんじゃないやろうかい。うたりして、のんびりした時もあった。弾丸の音もあんまりせんようなところだな。今夜こそ安氣に寝ることが出来るかなあいうて話したりすることも時、まにありました」

「そういう晩は少ないわけですね」

「はあ、少なかったな。要塞砲もある、迫撃砲もある、機関銃もある。音の絶え間がないんです。どこかで聞える。いまの機関銃なんか怖ろしいことはひとつもない。要塞砲が怖ろしい。相当、遠距離から来るんじゃないやけえな。それが、夜、曳光弾を撃ったら、真赤な弾丸が飛ぶのがみんな見えるんですよ、空を飛びよるのが。何発に一発か、合間に撃つ。いま、撃ちよるこの実弾がどこへ落ちよるか見るために、赤い弾丸を撃つんです。昼でいやあ、橙を投げつけるように見えるんですよ、空を飛びよるのが」

「橙をねえ」

「要塞砲じゃけえ大きいんです、弾丸も。その代り直撃を受けたら、そこらにおる者は木端ですよ。それがいまのコレヒドールの要塞から撃つのとバタアン半島から撃つのと、その二箇所から撃つんじゃないやけえな、バタアンの方がちっと距離が近いんです。それで、わしらがいったところへ数を十ほど数えたら来るんです。向うの撃った音を聞いて、ひとつ、ふたつというて数えて、十数えて来たものはバタアンから、もう五つ数えて来たものはコレヒドール。五つほど来る時間が長いわけ」

「なるほど」

「それだけ距離が遠いということです。この弾丸は十五じゃけえコレヒドールの要塞から撃つちよるいうことが分る。撃った向うの音を聞いて、それから弾着の音を聞くまでは出られん。それが少々のところへかかんでいても駄目です、めげるんじやから。よっぽど頑丈なところへ避難しないと。家なんか何ということはないんです。壕の、それもよっぽど頑固になったところでないとな」

「そうでしょうね」

「飛行機から落す爆弾は、地面に大きな穴が空きます。そこへスコールが降ると、ええ加減の池のようになっちゃります。水牛が泳いでは遊びよります。爆弾が落ちて破裂したところのあとが、吹っ飛んで泥が無いようになっちゃるんじやけえ、それへスコールの雨が溜るんです」

どこかで子供の声が聞える。

「同じ戦死いうても、十も十五も数えてから飛んで来る、大きな要塞砲の弾丸にぶつかって死んだのは、痛いという間がないから、それがいちばん楽な死に方じゃがのういうて、いつも糞度胸を決めていた」

「声を立てる間も無いでしょうからね」

「それがもう手を痛めたとか足を撃たれたとかいうのは難儀をするんです。おまけに暑い国じゃけえな、傷が痛むんです。すぐにお医者へかかったように十分な介抱をしてくれんですから。そりゃあ少々の苦しみじゃない。ところが、いまごろ子供にそういう話をして、あまりはつきり聞きもしません」

「トラックの運転をしている息子さんにですか」